



俳壇 読売

矢島 渚男 選

裏山の雪庇気づかふ夜の電話

見附市 徳橋よし子

【評】雪庇は雪の斜面がせり出して庇のように突き出した所。夜、家の裏山の雪が崩れて来ないか、心配して電話が来たという。お子さんからか。見附市は新潟県の中部の町。思ひ出の角は取れしか除夜の鐘

鶴林市 坂口 穰

【評】除夜の鐘を聴きながらの感慨であろう。俺もつ張って生きてきたが今はいくらか角が取れてきたのかなあ。鐘の音も柔らかく聞こえる。老犬の腹波打たせ日向ぼ

川崎市 久保田秀司

【評】良き従者、友でもあった愛犬の老いた姿を「腹が波打つ」の一語で捉えている。少しの散歩にもかくのごとし。写生力が俳句の基礎。数へ日や出雲に恋を占ひて

東大阪市 土屋 鉄男

一張羅は泥染めの服初雀

南島原市 酒井 月子

恩師の質状墨書き強く濃き

長野市 賀勢 輝子

霜柱蹴って杭打つ測量士

つくば市 高瀬真砂緒

初風呂やいの一番の下足札

千葉市 中村 智善

白鳥の白の紛れず波に揺れ

倉敷市 中路 修平

余生には余生のいのり初詣

横浜市 瀬古 修治

小池 光 選

高野ムツ才 選

一年を語らば長し能登は雪

松山市 三木須磨夫

【評】一年は短いようで長い。誰にも語り尽くせない出来事がある。まして、昨年元旦、大地震に見舞われた能登の人々は如何程だろうと、雪の便りを聞き心を痛めている。しるるるや雑然たる温き場所

水戸市 加藤木よういち

【評】物の整理が苦手なことでは人後に落ちないと自覚しているせいにか、この温みは実感できる。部屋が整然としていると時雨は寒すぎる。咳の子がごめんさいと目と言へり

対馬市 神宮 斉之

【評】ゴホンゴホンと咳をした後、思わず両手で口を塞いだ幼子の目の動きが手にとるようだ。目は口ほどに物を言う。

読む程に酌み交はしたくなる質状

落葉踏む音の言葉となつてゆく

香川県 福家 市子

たのしげに踏まるる音や霜柱

あきる野市 戸田 幸雄

集い来し神と語らう里神楽

千葉県 笹生 君雄

電飾の街路樹にある冬芽かな

君津市 榎本 静江

問いⅢの三角関数雪しまき

新潟市 古泉 浩子

上座よりいぶりがつこを齧る音

前橋市 内藤 光

栗木 京子 選

正木ゆう子 選

持ち替へてもち変へて視る初鏡

神奈川県 石原美枝子

【評】俳句に動詞は少ななくとの掟を破り、鏡を前の動作を活写。大きい鏡と手鏡で合わせ鏡をしているのだらう。動詞の多さに、髪型を気にする真剣さがうかがわれ、共感。年迎ふひと日ひと日を生きてゆく

千葉市 小林 昭

【評】「こちらも「迎ふ」「生きてゆく」という終止形動詞の畳みかけによつて、途な印象が滲み出ている。動詞も、使いようなのである。年賀状いづれの蛇も愛らしき

奈良県 刈田 陽子

【評】一見平明な内容に思われるが、「愛らしき」には現代への批評が含まれているのだらう。何か大いなるものへの畏れを忘れた私たちかも。逆光に浮く一月の鹿の息

神戸市 山口 誠

水槽にぼつねんと亀年暮るる

東大阪市 岡田 卯月

何もかも多めに買つて年の暮

西宮市 平田 あい

元日の場所を詰め合ふ一間かな

西東京市 永井 康信

除夜の鐘聴きのがさじと灯を消しぬ

宇陀市 泉尾 武則

初湯殿張り上げ己が一番句

越谷市 小林ゆきお

菊枯るるなほ小粒なる黄を蔵し

東京都 望月 清彦

俵 万智 選

小澤 實 選

声を呑み呑んだままなり能登の冬

高岡市 池田 典恵

【評】震災に遭遇し、さらに水害の被害も受けた、能登の現状と向きあって、声が出ない、出せないというのである。年末年始、能登を訪ねた選者も心から共感する。初湯出づ七十七の身湯気放ち

川口市 高橋まさお

【評】今年初めての湯から出た、今年七十七歳の体が湯気を放っているというのである。自分自身をこんなかたちではあるが見つめている。スキー帽脱ぎたるホットココアかな

つくば市 小林 浦波

【評】スキーを楽しんだ後、室内に入って、温かく甘いココアを楽しんでいる。ほっとしている感じを「ホットココア」の句跨りに味わう。若水を真つ直ぐ通す筈かな

横浜市 岡 一夏

煤迷や三本立ての映画館

日立市 菊池 風峰

クリスマス電子レンジのチンと鳴る

川崎市 折戸 洋

もつに塩強めに振つて寒きかな

名古屋市 山内 三雅

柚子一つもいで今夜は独り鍋

袖ヶ浦市 浜野まゆる

理容師とひとつ鏡に初笑ひ

東京都 天地わたる

歳晩の妻の頭に吹出物

宇都宮市 津布久 勇

黒瀬 珂瀾 選

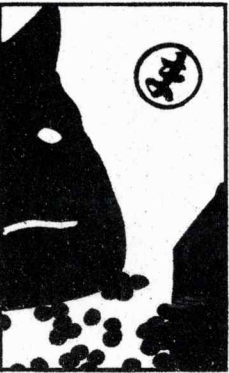
長谷川権さん「四季のうた ウクライナの琴」刊行



長谷川権 四季のうた

俳人の長谷川権さんが朝刊2面に連載しているコラム「四季」をまとめた『四季のうた ウクライナの琴』（中公文庫、880円）写真が刊行された。2022年4月からの1年分を収めた第17集。正岡子規、杜南らの古今東西の名句、名歌、名詩を読み解く。22年6月の「四季」では、19世紀ウクライナの国民的詩人タラス・シェフチェンコの詩集『コプザール』から10の詩句を掲載。巻頭エッセイではウクライナの詩人オスタップ・スリヴィンスキーさんが、戦争で変わったしまった言葉を集めた『戦争語彙集』を紹介。言葉は「人類の体験を記憶する」装置だとしている。

◆読者プレゼント 長谷川権さんのサイン入り「四季のうた」を10人に贈ります。希望者は住所、氏名、電話番号に著者への一言を添え、〒1100・8055 読売新聞東京本社文化部「四季」係へ。28日消印有効。



題字デザイン・イラスト 福田美蘭

明記。 読歌(俳)